

松江城天守の復原研究

ー 築城当初の松江城天守の姿について ー

Keywords

松江城 出雲国松江城絵図 竹内右兵衛書つけ
破風 格式低下

1. はじめに

1.1 研究背景・目的

島根県松江市の松江城天守(写真1)は千鳥が羽を広げたような姿に見えることから、千鳥城とも呼ばれている。

しかし、近年の調査によると、千鳥城の名の由来はこのような説ではないと言われている。正保元年~5年(1644~1648)に描かれたとされる出雲国松江城絵図(正保城絵図)には、現存する天守にはない破風が描かれている。天守がこうありたいという姿を描いたものだと言われているが、天守に破風が付けられていたとされる貫跡が柱に確認された。これにより正保城絵図の天守が築城当初の姿を描いたものであり、破風の多さから千鳥城と呼ばれたという説が有力となってきた。

そこで本研究では、築城当初の松江城天守の姿について調査し、これがどのような姿であったのかを明らかにすることを目的とする。また、現存天守の姿へと修理する際に破風が取り外され、築城当初のものより格式が低くなったと言える。この理由も明らかにしていく。

1.2 研究方法

- ①松江城に関連する絵図や書物といった史料の収集
- ②収集した史料を用いた分析・復原・考察



写真1 松江城天守

2. 松江城について

2.1 松江城の概要

松江城は、松江開府の祖である堀尾吉晴により慶長12年(1607)から亀田山に築城され慶長16年(1611)に落成し

た平山城である。縄張の大意は梯郭式であるが、本丸・二の丸・三の丸は連郭式で一直線上に並んでいる。

2.2 松江城天守の概要

天守は石垣を含む高さが約30mであり、外観4重内部5階地下1階である。南側に附櫓を設けた複合式望楼型天守である。

2.3 松江城の歴史

松江城の歴史を表1に示す。

表1 松江城の歴史

年代	出来事
1607年	堀尾吉晴により松江城築城開始
1611年	松江城天守落成
1634年	京極忠高が藩主に
1638年	松平直政が藩主に、天守の修理も行われる以後松平氏が藩主を歴任する
1738年	江戸時代最大の改修工事が行われる(~1743年)
1871年	廃藩置県により松江藩消滅
1875年	松江城廃城、天守のみ残る
1894年	明治の大修理が行われる
1935年	国宝保存法により天守が旧国宝に指定される
1950年	国宝保存法廃止→文化財保護法施行天守は重要文化財に指定される昭和の大修理が行われる(~1954年)
2015年	天守が国宝に指定される

3. 史料について

3.1 出雲国松江城絵図について

出雲国松江城絵図(図1)とは、松江藩が制作した正保城絵図(幕府が全国の藩に作成させた城下町の地図)である

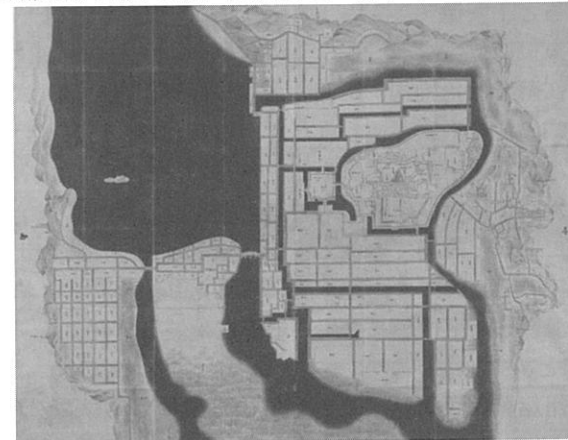


図1 出雲国松江城絵図(右方向が北)



AK13058 関 淳一

3.2 竹内右兵衛書つけについて

竹内右兵衛書つけ(写真2)とは、松江藩御大工の家柄であった竹内家に伝わる武家住宅を中心とする木割に関する秘伝書である。製作年代は1680年代である。昭和の大修理終了時に竹内家から松江市に寄贈された。昭和28年(1953)には、松江市の指定文化財になっている。

4. 築城当初の松江城天守について

4.1 出雲国松江城絵図に描かれた天守について

出雲国松江城絵図には、築城当初の姿と考えられる松江城天守(図2)が描かれている。延宝2年(1672)に描かれた出雲国松江城之絵図にもこれと同じ天守が描かれている。絵図に描かれた天守は現存するものにはない千鳥破風や唐破風が描かれている。元文3年~寛保3年(1738~1743)に行われ

た江戸時代最大の改修工事以降の絵図の天守にはこれらの破風は描かれていないことから、改修工事時に取り外されたのではないかとされている。

現存する天守と絵図の天守の違いを表2に示す。

表2 現存と絵図の天守の違い

	現存	絵図
外観	4重(望楼型)	5重(層塔型)
外壁の仕上げ	1・2重：下見板張 3・4重：①下見板張 ④漆喰塗	全て：①下見板張 ⑤漆喰塗
破風	 ○で囲まれた部分が築城当初にはなかったと言われる破風	 ○で囲まれた部分が現在では取り外されたとされる破風

4.2 竹内右兵衛書つけにおける天守の記述について

竹内右兵衛書つけには、松江城天守に関する記述がある。内容としては、各階平面図とそれらの説明が主である。特に2重目(内部2階)の部分(写真3)には「西二破風有

り」との記述が赤線で見せ消しされている。このことも築城当初の松江城天守には現在はない破風があったことの裏付けであると言われている。

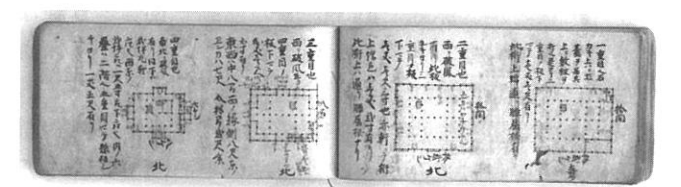


写真3 竹内右兵衛書つけ2重目記述部

4.3 現存する天守に存在する貫跡について

現存する松江城天守には写真4のような貫跡が確認できる。これらは出雲国松江城絵図の1重目屋根上東西の比翼千鳥破風、4重目屋根上東西の唐破風の位置と一致する。貫跡が確認できない破風もあるが、後述する絵図の正確性の高さにより、存在していたと推測できる。



写真4 貫跡

(左：2階東側北、真中：4階東側、右：4階西側)

4.4 重要文化財松江城天守修理工事報告書における築城当初の天守について

重要文化財松江城天守修理工事報告書は昭和の大修理時の報告書である。これには解体修理によって明らかになった事柄が多く記されている。ここにも破風に関する記述があり、その存在をほのめかしている。

5. 築城当初の松江城天守の復原・考察

5.1 築城当初の松江城天守の復原

収集した史料の分析から築城当初の松江城天守を復原する(図3)。

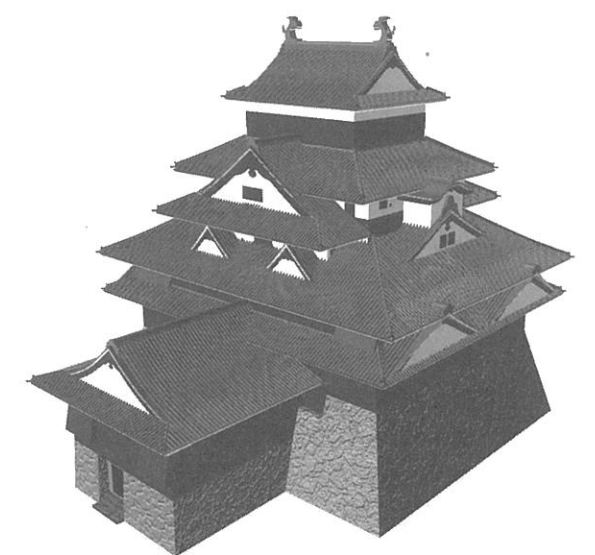


図3 築城当初の松江城天守

5.2 築城当初の松江城天守の復原による考察

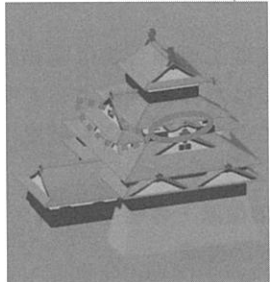
5.2.1 竹内右兵衛書つけの制作時期について

竹内右兵衛書つけの天守平面図は黒線で主文や外壁・柱・寸法などが、赤線で窓・狭間の位置や見せ消し線などが記されている。黒線と赤線は書つけの情報から、これらはほぼ同時期に記されたと言われている。しかし、復原時に出雲国松江城絵図の1重目東西の比翼千鳥破風を貫跡に沿って付けてみると、書つけの平面図の赤線の石落しや窓の位置と重なる。これらは破風を付ける際に邪魔となる。こういった矛盾が他にも見られる。また、書つけの平面図の形や窓・狭間の位置などは現存天守とほぼ一致する。これらから黒線と一部の赤線が記された後に、改修工事の計画案あるいは工事後の天守の情報として書つけに赤線で書き足されたと言える。つまり、黒線と赤線は一部を除き、同時期に記されていないと言える。

5.2.2 復原天守と出雲国松江城絵図における天守の違い

復原天守と絵図における天守の違いを表3に示す。

表3 復原天守と絵図の天守の違い

	復原天守	絵図
外観	4重(層塔型)	5重(層塔型)
外壁の仕上げ	全て：①下見板張 ④漆喰塗	全て：①下見板張 ④漆喰塗
破風・屋根	 実線で囲まれた部分は向唐破風 点線で囲まれた部分は庇	 実線で囲まれた部分は軒唐破風 点線で囲まれた部分は屋根

屋根の数の違いは、絵図における3重目屋根を設けると上の屋根と極端に近くなってしまうことから、絵図において誇張して描かれたものと推測できる。また、唐破風の違いであるが、現存天守に存在する貫跡に沿って設けると絵図のような軒唐破風でなく、向唐破風となる。他の城の正保城絵図においても、正確にそれらの天守が描かれたものもあるが、大部分が正確に描けておらず、外壁の仕上げ・屋根の数・破風の有無や位置などが実物と異なる。出雲国松江城絵図の天守はこれらの天守と比べると、詳細に描かれたものであるが、実際の築城当初のものと細かな違いがあると言える。

5.2.3 復原天守と現存天守の違い

復原天守と現存天守の違いは表2とほとんど一致する。

復原天守の外観は4重層塔型、現存天守の外観は4重望楼型であるが、改修工事によって層塔型→望楼型というような変更がなされた天守はこれまで例がない。しかし、松江城天守は通柱を各階交互に配する互入式通柱構法であり、これは他の層塔型天守にも見られることから築城当初は層塔型であり、改修工事で大入母屋破風が設けられ望楼型となったと言える。松江城天守は層塔型→望楼型へと改修された唯一の天守である可能性がある。

6. 松江城天守の格式低下について

松江城天守は破風を取り外し現存天守のような姿になったことから、築城当初より格式が低下したと言える。

そこで、松江城を除く現存11天守の中で松江城のように修理によって格式が低下したもの、あるいは規模縮小した天守を調査し、松江城天守の格式低下理由解明の参考例とする。

6.1 天守修理における時代背景について

天守修理には以下のような時代背景がある。

- ①明暦3年(1657)に起こった大火より江戸城が焼失し、他の幕府城郭(大坂城・二条城など)とともに再建されなかった。幕府城郭に天守がないことから、幕府をはばかり、天守を再建しないという城が全国的にも見られるようになる。また、慶長5年~元和元年(1600~1615)慶長の築城大盛況期においても幕府をはばかり、天守を築城しない城もあった。
- ②城は泰平の世になっていくと、その軍用的機能が無用になり、規模縮小や簡略化が行われていく。天守も元々の姿から規模を縮小して計画や改修、移築などが行われた。これは、幕府をはばかりという面もあるが、城の規模縮小や簡略化が全国的に流行になっていたことも要因だと言われている。また、失われた天守を再建する際に天守という言葉を使わずに三重櫓(御三階櫓)として幕府に建築許可を申請する場合もあり、これを天守の代用としていた。こういった時代背景にも関わらず、天守を再建した城も存在する。

6.2 選定した天守について

6.1における時代背景を踏まえ、以下の天守を選定する。

- ・松本城天守
- ・彦根城天守
- ・伊予松山城天守

6.2.1 松本城天守について



写真5 松本城天守

松本城天守(写真5)は長野県松本市に建ち、国宝に指定されている。天守・乾小天守・渡櫓・辰巳附櫓・月見櫓からなる連結式+複合式の構成である。

昭和の大修理時に天守

の部材から数多くの痕跡(貫跡など)が発見された。築城当初は現在よりも破風なども多く、最上階には縁側が巡らされるなど豪華に計画されていたと言われているが、これが実現されたものなのか計画止まりだったのかは不明である。築城当初と現存のもの姿が異なっていた場合、松江城と同じく修理によって外観の格式が低くなったと言える。

この修理の理由は、松本の地の冬季の寒気への対策、強風に対する構造上の補強、天守の豊臣色の払拭のためといったことが挙げられる。

6.2.2 彦根城天守について



写真6 彦根城天守

彦根城天守(写真6)は滋賀県彦根市に建ち、国宝に指定されている。天守・附櫓からなる複合式の構成である。現存する彦根城天守は3重であるが、移築されたとされる大津城天守は5重である。このことから彦根城天守は前身であった大津城天守より規模を縮小され、築城された。移築なので松江城天守と状況は異なる。

移築時の規模縮小の理由は、都の鎮護と西国への押さえの拠点となるので早期完成が求められたため、工事期間短縮のためといったことが挙げられる。

6.2.3 伊予松山城天守について



写真7 伊予松山城天守

伊予松山城天守(写真7)は愛媛県松山市に建ち、重要文化財に指定されている。天守・小天守・南隅櫓・北隅櫓からなる連立式の構成である。築城当初は外観5重であったが、寛永16年(1639)に行われた改修工事により、外観3重となった。

この改修の理由は、山頂部での建物の安全を期すため、幕府をはばかりのためといったことが挙げられる。

6.3 天守修理時の松江藩の状況について

松江藩は松平直政が藩主の時代から、財政状況は良くなかった。特に5代藩主宣維(のぶずみ)の時代は、冷害・旱魃・水害などが多発し、収穫が不安定になり飢饉とそれに伴う一揆が起きた。財政状況も8代将軍吉宗に結婚を勧められても結婚資金が用意できず、延期するほどの苦しさであった。宗衍(むねのぶ)が6代藩主となった享保16年(1631)の財政状況は苦しいままで、翌年の享保の大飢饉とそれに伴う一揆、享保18年(1733)の出雲地方大地震、元文元年(1736)の西北の暴風などが起きた。その後の元

文3年~寛保3年(1738~1743)に江戸時代最大の改修工事が行われた。

6.4 松江城天守の格式低下に関する考察

天守修理の時代背景と比較した3天守から松江城天守は幕府をはばかりのために現存天守へと改修したと考えられる。また、一揆への対策として軍備(石落し・狭間)の増設、破風を取り外し格式を低くして住民をはばかりすることも改修理由と考えられる。

改修までの経緯は、享保3年(1718)に御大工頭斎田彦四郎が「御天守小型」を製作したことからはじまると考えられる。これは現在残る松江城天守雛形(写真8)ではないかという説もあるが、雛形の製作時期が不明なため明確で



写真8 松江城天守雛形

はない。「御天守小型」を改修計画案としたが、財政危機や結婚資金の調達のため5代藩主宣維の時代に工事を行えないまま宗衍が6代藩主となる。その後、飢饉とそれに伴う一揆への対策としての軍備拡大、自然災害の傷みによる天守の修理が必要となり、「御天守小型」を基に改修が行われたと推測できる。

7. 総括

今回の研究において、松江城天守の国宝としての歴史的価値を再認識することができたとともに築城当初の天守の復原、現存天守への改修理由・経緯の考察などによりこれまで述べてきた松江城天守に関する様々な事柄が確認できた。これらの多くは推測の段階であるが、今後の調査研究による新たな史料の発見などにより更に深く考察することが可能になるはずである。今後の調査研究の発展に大いに期待したい。

参考文献

- 1) 内藤昌：城の日本史 講談社 2011
- 2) 松江市教育委員会：松江城研究1号~2号 松江市教育委員会 2012、2013
- 3) 西尾克己：国宝松江城一美しき天守ー 山陰中央新報社 2015
- 4) 重要文化財松江城天守修理事務所：重要文化財松江城天守修理事務報告書 松江 1955
- 5) 太丸伸章：松本城ー武田流縄張術の冴え 学習研究社 1995
- 6) 石井悠：松江藩(シリーズ藩物語) 現代書館 2012
- 7) 松江市公式ホームページ www.city.matsue.shimane.jp
- 8) 国立公文書館デジタルアーカイブ www.digital.archives.go.jp
- 9) 彦根観光ガイド www.hikoneshi.com
- 10) 松山城ホームページ www.matsuyamajo.jp
- 11) 竹内右兵衛書つけの画像データは松江歴史館提供